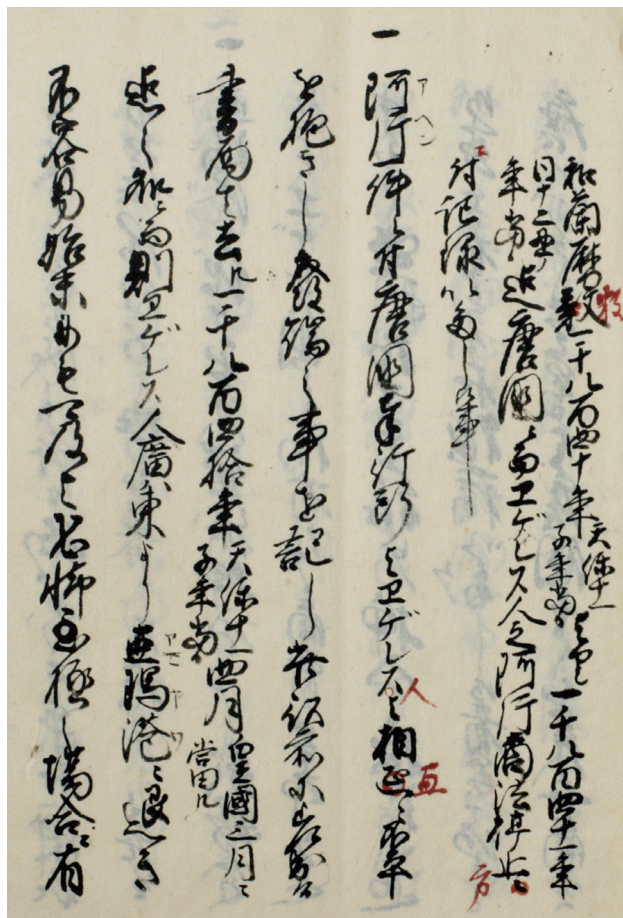


アヘン戦争



* 毛利家文庫 29風説67「兼重源六持帰之長崎ニ於ケル風説書」

「和蘭（オランダ）暦数1840年（天保11子年当候）より1841年（同12丑ノ年当候）まで唐国にてエゲレス人の阿片（アヘン）商法停止方に付記録いたし候事」と始まります。

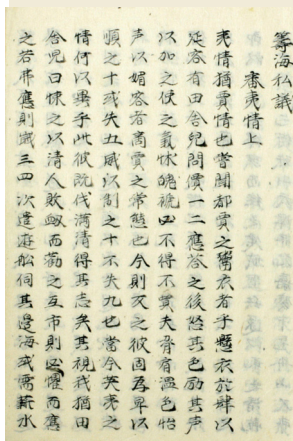
解説

アヘン戦争における清国の敗戦の情報は、すみやかに日本にも伝わり、大きな衝撃を与えました。すでに蘭学が発達していた日本では、その国際的な意味が理解され、危機感を募らせました。

それまで異国船打払令を出すなど強硬な態度をとっていた幕府は、薪水給与令を新たに打ち出すなど、欧米列強への態度を軟化させました。

左の資料は萩藩の長崎聞役、兼重源六が長崎で入手した、アヘン戦争に関する機密書類です。長崎聞役とは西国の14藩が長崎に置いた役職で、聞役は幕府長崎奉行からの指示を国元に伝え、貿易品の調達や情報の収集を行いました。

萩藩は出島にほど近い長崎新町に蔵屋敷があり、オランダ船が長崎に入港し滞在する5～9月の5ヶ月間、聞役が詰めていました。



* 毛利家文庫 75維新記事雑録246「籌海私議」

幕末の儒者塩谷宕陰（とういん）がアヘン戦争を聞き、海防の必要を論じたものです。宕陰はほかに、アヘン戦争におけるイギリスの中国侵略の非道さを論じた「阿芙蓉彙聞」も著しました。